

イネいもち病の防除対策について

農作物の病害対策は発生前～発生初期の防除が重要となっている。いもち病も同様であるが、本病には **BLASTAM** という感染を予測するシステムが確立されており、これを利用して適期防除を行うことができる。ここでは、**BLASTAM** を活用した適期防除や耕種防除、薬剤防除について説明する。

1 初発時期の推定

BLASTAM での感染好適条件が地域で広範囲に出現した 7～10 日後が初発時期と推定される。なお、感染好適条件が広範囲で出現して、周期的（7 日程度）に繰り返して出現すると発生程度が高くなりやすい。

いもち病の薬剤には「使用時期：葉いもちに対しては初発〇〇日前～初発時」と記載されているものもあるため、**BLASTAM** を参考にして散布時期を決定する。

2 防除

(1) 耕種防除

種子に病原菌が付着していることもあるため、塩水選を実施し、健全種籾のみ利用する。また、育苗箱の周囲に稲わらや籾殻を放置しない。

窒素が多いと発病しやすくなるため、施肥量に注意する。特に穂肥はいもち病の広域発生期に当たるため、発生を確認しながら施肥する。

補植用置苗は発生源となりやすいため、補植を終えたら速やかに処分する。

いもち病の発生には品種間差があるため、常発地帯では耐病性に優れた品種の作付を検討する。

表 福島県で主に作付されている品種のいもち病抵抗性

	葉いもち抵抗性	穂いもち抵抗性
コシヒカリ	弱	弱
ひとめぼれ	やや弱	中
天のつぶ	やや弱	強
里山のつぶ	やや強	強
あきたこまち	中	やや弱
福笑い	中	中
チヨニシキ	強	やや強

(2) 薬剤による防除

種子に病原菌が付着していることもあるため、種子消毒を徹底する。

育苗箱施用剤や水面施用剤を使用し、葉いもちの初期発生を予防する。水面施用剤を散布する時期は **BLASTAM** を参考に決定する。

窒素の追肥は発生を助長するため、いもち病の発生しているほ場では薬剤散布も併せて行う。

上位葉の病斑は穂いもちの発生を助長するため、これらの病斑が見られる場合は注意する。

穂いもちを対象に水面施用剤を施用する場合は、各薬剤の施用適期に湛水して散布し、その後7日間以上は止水する。

穂いもちを対象に散布剤を施用する場合は、穂ばらみ末期と穂揃期の2回散布を基本に、多発生のおそれがある場合には、さらに傾穂期にも追加防除を行う。

低温などで出穂期間が長引く場合は穂ばらみ末期を基点として、7～10日おきに散布剤を2～3回散布する。

耐性菌の出現を防ぐため、同じ系統の薬剤の連用は避ける。

3 QoI 剤及び MBI-D 剤耐性菌

QoI 剤（ストロビルリン系殺菌剤：RAC コード「C3」）には、アミスター、嵐、オリブライト等数剤あり、育苗箱施用剤や水田での散布剤として使用されている。耐性菌が平成24年に初めて九州、中国地方の一部で確認され、発生県では使用制限が設けられている。本県でも耐性菌の発生が確認されている。

MBI-D 剤（RAC コード「I2」）には、ウィン、デラウス、アチーブの3剤がある。耐性菌が平成13年に初めて佐賀県で確認され、以降西日本から広がり平成17年には福島県でも確認された。MBI-D 剤は現在本県ではほとんど使用されていない。

これまで QoI 剤及び MBI-D 剤の使用でいもち病が多発した地域では、これら剤の使用を避ける。また、防除回数が制限される栽培体系の場合もこれら剤の使用を避ける。なお、育苗箱施用剤でこれら剤を使用した場合は、本田期防除では異なる系統の薬剤を使用する。